

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 07-017848

(43)Date of publication of application : 20.01.1995

(51)Int.Cl.

A61K 7/48

A61K 7/00

(21)Application number : 05-162517

(71)Applicant : SANSHO SEIYAKU CO LTD

(22)Date of filing : 30.06.1993

(72)Inventor : HONDA SHINSUKE

(54) SKIN EXTERNAL PREPARATION

(57)Abstract:

PURPOSE: To obtain a skin external preparation by combining specific plant extract(s) with kojic acid and/or a derivative therefrom to raise stability to photodegradation of the kojic acid or said derivative and provide full medicinal virtues inherent in the kojic acid or said derivative.

CONSTITUTION: The skin external preparation containing (A) kojic acid and/or a derivative therefrom and (B) at least one kind of extract of plant(s) selected from a group composed of *Coptis japonica*, *Polygala tenuifolia*, *Puerariae radix*, *Clamaria*, *Saponaria officinalis* L., *salvia*, *Narcissus tazetta* L., *Achillea millefolium* L., *Aesculus turbinata*, tea, tulip, *Althaea officinalis* L., a kind of radish, beet, *Lycoris radiata*, and Henna.

LEGAL STATUS

[Date of request for examination] 24.05.2000

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number] 3415200

[Date of registration] 04.04.2003

[Number of appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of extinction of right]

THIS PAGE BLANK (USPTO)

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平7-17848

(43) 公開日 平成7年(1995)1月20日

(51) Int.Cl. ⁸	識別記号	序内整理番号	F I	技術表示箇所
A 6 1 K 7/48		9051-4C		
7/00	C	9051-4C		
	X	9051-4C		
	K	9051-4C		

審査請求 未請求 請求項の数 1 O L (全 10 頁)

(21) 出願番号 特願平5-162517

(22) 出願日 平成5年(1993)6月30日

(71) 出願人 000176110

三省製薬株式会社

福岡県大野城市大池2丁目26番7号

(72) 発明者 本多 伸介

福岡県大野城市大池1丁目10-7

(74) 代理人 弁理士 庄子 幸男

(54) 【発明の名称】 皮膚外用剤

(57) 【要約】

【目的】 コウジ酸及び／又はその誘導体に、特定の植物エキスを併用することによって、コウジ酸又はコウジ酸誘導体の光分解による安定性を高め、コウジ酸又はコウジ酸誘導体本来の薬効がいかに発揮される皮膚外用剤を提供する。

【構成】 コウジ酸及び／又はその誘導体と、オウレン、オンジ、カッコン、クマセバ、クラメリア、サボンソウ、サルビア、スイセン、セイヨウノコギリソウ、セイヨウトチノキ、チャ、チューリップ、ヒロウダオイ、ハツカダイコン、ビート、ヒガンバナ、ヘンナからなる群から選ばれる植物のエキスの一種または二種以上とを含有することを特徴とする皮膚外用剤。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 コウジ酸及び／又はその誘導体と、オウレン、オンジ、カッコン、クマセバ、クラメリア、サボンソウ、サルビア、スイセン、セイヨウノコギリソウ、セイヨウトチノキ、チャ、チューリップ、ピロウダオイ、ハツカダイコン、ビート、ヒガンバナ、ヘンナからなる群から選ばれる植物のエキスの一種または二種以上とを含有することを特徴とする皮膚外用剤。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】本発明は、コウジ酸及び／又はその誘導体と特定の植物のエキスを有効成分として含有する皮膚外用剤であって、より詳しくは、特定の植物エキスを併用することによって、コウジ酸又はその誘導体の安定性が向上でき、それらの薬理作用が効果的に発現される皮膚外用剤に関する。

【0002】

【従来の技術】皮膚は他の臓器と異なって、外界の影響、すなわち日光、温度、湿度などの物理的因子、又は洗剤などの化学的因子の影響を受けやすい。中でも特に日光に含まれる紫外線の皮膚に及ぼす悪影響は深刻である。すなわち、長時間紫外線に曝され日焼を起こすことにより皮膚が傷つき、炎症を引き起こし、皮膚は脆弱化して水疱変化をきたすに至る。このような状態が繰り返されると、皮下組織のコラーゲン線維が破壊され、色素沈着、肌荒れ、小ジワの発生などの皮膚疾患が促進されることになる。

【0003】人間の皮膚に紅斑などの炎症を惹き起こす紫外線の波長は、約280ないし320nmの中波光線（U、V、B波長域）であることから、日焼け防止を目的とした化粧品には一般に、U、V、B波長域の紫外線を選択的に吸収する化合物、特に紅斑を惹き起こすとされている308nmに極大吸収地を有する化合物、例えば、ベンソフェノン系化合物、サリチル酸系誘導体やパラアミノ安息香酸およびそのエステル類およびケイ皮酸誘導体などの紫外線吸収剤が配合されてきた。

【0004】しかしながら、従来知られているこれらの日焼け防止化粧品は、前述したように、主として、U、V、B波長域の紫外線を吸収することにより日焼けを防止するものであるが、日焼け防止の効果は必ずしも充分なものとはいえず、又、日焼けによる炎症を効果的に防止する外用剤としては全く効能を示さないばかりでなく、他の基剤との相溶性の問題、紫外線吸収剤の分解による紫外線吸収能の低下や着色、さらには皮膚刺激の増大等安全性の点で問題を生じていた。一方、色素沈着を防止する化粧品ないし外用剤としてビタミンCをはじめ各種の薬剤が使用されているが、紫外線（U、V、B領域）による炎症を伴った重い症状の色素沈着を有効に改善する外用剤としての効果を発揮するには至っていない。

【0005】本出願人が色白外用剤有効成分として、先に開発したコウジ酸は、かかる要件を兼ね備えた薬剤、すなわち紫外線吸収能を有し、しかも抗炎症作用をも併せ持つ理想的な色白剤として知られている（例えば、特公昭56-18569号公報、特公昭61-10447号公報、特公昭58-34446号公報、特開昭55-157509号公報等）。しかしながら、コウジ酸はこのような優れた成分特性を有しているものの、紫外線によって経時的に着色分解するという欠点があり、薬理作用が充分発揮されない場合があった。

【0006】

【発明が解決しようとする課題】本発明の目的は、特定の植物のエキスを併用することによって、コウジ酸又は、コウジ酸誘導体の光分解による安定性を高め、コウジ酸又はコウジ酸誘導体本来の薬効がいかに発揮される皮膚外用剤を提供することにある。

【0007】

【課題を解決するための手段】本発明者らは、上記課題を解決するため鋭意研究を行った結果、オウレン、オンジ、カッコン、クマセバ、クラメリア、サボンソウ、サルビア、スイセン、セイヨウノコギリソウ、セイヨウトチノキ、チャ、チューリップ、ピロウダオイ、ハツカダイコン、ビート、ヒガンバナ、ヘンナからなる群から選ばれる植物のエキスの一種又は二種以上をコウジ酸及び／又はその誘導体に併用することによって、それらの光安定性、（U、V、Bによる光分解性）が改善され、色白作用が効果的に発揮されることを見出し、さらに驚くべきことに、相乗的な抗炎症作用が得られることを見出し本発明を完成した。

【0008】すなわち、本発明によれば、オウレン、オンジ、カッコン、クマセバ、クラメリア、サボンソウ、サルビア、スイセン、セイヨウノコギリソウ、セイヨウトチノキ、チャ、チューリップ、ピロウダオイ、ハツカダイコン、ビート、ヒガンバナ、ヘンナからなる群から選ばれる植物のエキスの一種又は二種以上を含有することを特徴とするコウジ酸又はコウジ酸誘導体の光安定性の改善された色白作用、抗炎症作用に優れた皮膚外用剤が提供される。

【0009】

【発明の具体的説明】本発明において使用されるコウジ酸（5-オキシ-2-オキシメチル-γ-ピロン）としては、5-オキシ-2-オキシメチル-γ-ピロンの純品、コウジ酸生産能を有する公知の菌株を培養して得られるコウジ酸を主成分とする醗酵液、該醗酵液の濃縮液、及び該醗酵液からコウジ酸を抽出して結晶化したもの等が使用される。

【0010】コウジ酸誘導体としては、例えば、特公昭60-10005号、特公平1-45472号、特公平3-74229号公報に開示されたもの、特公昭58-22151号、特公昭58-22152号公報に開示さ

れているコウジ酸のエステル化物及びコウジ酸の2位の-CH₂OH基に糖類を結合させることによって、コウジ酸分子を安定化させたコウジ酸誘導体など公知のものを単独または二種以上を組み合わせて用いることができる。コウジ酸及び／又はその誘導体と併用する特定の植物エキスとしては、以下のものが例示できる。

【0011】オウレン (*Coptis japonica* Makino (Ranunculaceae)) は、北海道、本州の日本海側地域の山地に多い小形の多年草である。そのエキス (Japanese Coptis Extract) としては、オウレンまたはそのほかの同属植物の根をほとんど除いた根茎から水を加えて抽出後、濃縮して得られたものが好適に使用できる。

【0012】イトヒメハギ (*Polygala tenuifolia* Willd) は、ヒメハギ科の多年性草本である。オンジ (*Polygalae Radix*) とは、その根のことを言い、オンジエキスとしては、エタノール、精製水などで抽出して得られるものが好適に使用できる。

【0013】クズ (*Pueraria lobata* Willd) とは、マメ科のつる性多年性草本であり、地下に径10ないし20cmにおよぶ貯蔵根がある。カッコン (葛根) (*Puerariae Radix*) とは、その貯蔵根のことを言い、そのエキスとしては、エタノール、精製水などで抽出して得られたものが、好適に使用できる。

【0014】クマセバ (*Cumaceba*) は、マメ科ブラチミスシウム属の植物で、ブラチミスシウム・トリニタティス (*Platymiscium trinitatis*) といい、古くから強壮剤として用いられてきたものである。そのエキスとしては、水、エタノール、プロピレングリコール等で抽出したものが好適に使用できる。

【0015】クラメリア (*Rhatany*) は、南米産の小灌木で、そのエキスとしては、根から抽出されたものが好適に使用される。

【0016】サボンソウ (*Saponaria officinalis*) はヨーロッパ原産の多年草で、高さ30ないし60cmになる草本である。そのエキス (*Saponaria Extract*) としては、サボンソウの葉からプロピレングリコール、1, 3-ブチレングリコール又はこれらの水溶液で抽出して得られたエキスが好適に使用できる。

【0017】セージ (*Salvia officinalis* L.) はシソ科の多年草で、ヨーロッパの原産で、地中海沿岸、日本各地で栽培され、日本では一般にサルビアとよばれている。そのエキス (*Salvia Extract*) としては、全草から精製水、プロピレングリコール、1, 3-ブチレングリコール、エタノールなどで抽出されたものが好適に使用できる。またその油性エキスとしては、パーシク油と流動パラフィンの紺液で抽出されたものが好適に使用できる。

【0018】スイセン (*Narcissus tazetta* L. var. *chionensis* Roemer) は、ヒガンバナ科の多年草本で、そのエキスは、鱗茎から抽出されたものが好適に使用でき

る。

【0019】セイヨウノコギリソウ (*Achillea millefolium* L.) は、キク科の多年草で、そのエキス (*Milfoil Extract*) としては、全草から抽出したものが好適に使用できる。

【0020】マロニエ (*Aesculus hippocastanum* L.) はセイヨウトチノキと言われ、バルカン半島原産のトチノキで、日本でも街路樹としてよく知られ、広範に栽培されている。そのエキス (*Horse Chestnut Extract*, *Horse Chestnut Extract Powder*) としては、果実または葉を、プロピレングリコール、1, 3-ブチレングリコール、精製水、エタノールなどで抽出して得られるものが好適に使用できる。

【0021】茶 (*Thea sinensis* L.) は、各地に栽培される常緑の灌木であり、広く飲料として用いられている。チャエキス (*Tea Extract*) としては、茶の枝葉を減圧下で乾留を行い、留分にエタノールあるいはグリセリンと精製水を加えたもの、あるいは茶の葉をエタノールで抽出したものが好適に使用できる。

【0022】チューリップ (*Tulipa gesneriana* L.) は、ユリ科の多年草本で、そのエキス (*Tulip Extract*) としては、花から抽出したものが好適に使用できる。

【0023】ヒロウドアオイ (*Althaea officinalis* L.) は、ヨーロッパ原産で地中海東部沿岸地方の塩分のある沼沢に自生する。草高1.5ないし2mの多年草である。そのエキス (*Althaea Extract*) としては、根から精製水、1, 3-ブチレングリコール、プロピレングリコール、エタノール、またはこれらの混液にて抽出して得られたものが好適に使用できる。

【0024】ハツカダイコンとは、カイワレ大根のことであり、そのエキスとしては種子から抽出したものが好適に使用できる。

【0025】ビート (*Beta vulgaris* L.) は、アカザ科の多年草で、そのエキス (*Beet Extract*) としては、葉及び茎から抽出したものが好適に使用できる。

【0026】ヒガンバナ (*Lycoris radiata* Herbert) は、ヒガンバナ科の多年生草本で、そのエキスは、鱗茎を、精製水などで抽出したものが好適に使用できる。

【0027】ヘンナエキス (*Henna Extract*) としては、北部アメリカ、インドなどの熱帯地方に産する灌木 (*Lawsonia alba*, *Lawsonia spinosa* L., *Lawsonia* L.) などの葉及び幹を乾燥して得られるものが好適に使用できる。

【0028】本発明において、前記コウジ酸及び／又はその誘導体と植物エキスの配合量は、クリーム、ローション、乳液、パック、化粧水、エッセンスなどの化粧料の場合と、軟膏剤、パップ剤、プラスター剤などの外用剤として使用する場合のいずれにおいても、製剤全体に対して、植物抽出エキスが0.0001ないし20重量

%, 好ましくは0.01ないし10重量%, コウジ酸及び/又はその誘導体が0.001ないし10重量%, 好ましくは0.1ないし5重量%の範囲で配合される。

【0029】本発明の皮膚外用剤は、外用施用に適するものであれば特に制限はなく、先に挙げたように、例えばバップ剤、プラスター剤、ペースト剤、クリーム、軟膏、エアゾール剤、乳剤、ローション、乳液、エッセンス、パック、ゲル剤、パウダー、ファンデーション、サンケア、バスソルトなどの医薬品、医薬部外品、化粧品として公知の形態で幅広く使用に供されるものである。

【0030】本発明の外用剤を製する場合、通常に用いられる種々の公知の有効成分、例えば塩化カルプロニウム、セファンランチン、ビタミンE、ビタミンEニコチネート、ニコチン酸、ニコチン酸アミド、ニコチン酸ベンジル、ショウキョウチンキ、トウガラシチンキなどの末梢血管拡張剤、カンフル、メエントールなどの消涼剤、ヒノキチオール、塩化ベンザルコニウム、ウンデシレン酸などの抗菌剤、塩化リゾチム、グリチルリチン、アラントインなどの消炎剤、アスコルビン酸、アルブチンなどの色白剤、胎盤抽出液、肝臓抽出物、乳酸菌培養抽出物などの動物・植物・微生物由来の各種抽出物などを適宜添加して使用することができる。

*

試験に使用する乳液基剤

	(重量%)
(A) ポリオキシエチレンベヘニルエーテル (20E.0.)	0.50
テトラオレイン酸	
ポリオキシエチレンピット (60E.0.)	1.00
親油型モノステアリン酸グリセリン	1.00
ステアリン酸	0.50
ベヘニルアルコール	0.50
天然ビタミンE	0.02
防腐剤	適量
(B) 1,3-ブチレングリコール	5.00
カルボキシビニルポリマー	0.01
N-ラウロイル-L-グルタミン酸ナトリウム	0.50

製法

(A)に属する成分を加熱溶解し(油相)、別に(B)に属する成分を加熱溶解した(水相)。油相に水相を加

*【0031】また、前述の医薬品、医薬部外品、化粧品には公知の有効成分や界面活性剤、油脂類などの基剤成分の他、必要に応じて公知の保湿剤、防腐剤、酸化防止剤、紫外線吸収剤・散乱剤、キレート剤、pH調整剤、香料、着色剤など種々の添加剤を併用できる。

【0032】

【実施例】次に実施例並びにその効果の試験例を挙げるが、これらは本発明を何ら限定するものではない。

【0033】<試験例1> 経時安定性試験

- 10 下記の乳液基剤に、表1に示した有効成分を配合したものを調製(なお、本試験においては、原植物を10gに溶媒100mlを加え、室温で3時間攪拌した後、蒸発乾固した植物エキスをを用いた)し、コウジ酸またはコウジ酸誘導体の安定性試験を行った。検体は紫外線(UV-B)を照射しながら50℃で2ヶ月間保存した。保存開始から1か月目、それぞれの検体についてコウジ酸又はその誘導体(代表例としてコウジ酸グルコシド)の含有量を求め、試験開始日からの経時変化を測定した。有効成分の定量は、高速液体クロマトグラフ法(紫外線分光光度計検出器:波長270nm)により行った。

【0034】

え、攪拌乳化後、冷却して乳液基剤を得た。

【0035】

表 1

有効成分	有効成分の配合量 (重量%)																				例	
	実										施											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20		
コウジ菌	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0							1.0	1.0	1.0	1.0		
コウジ菌グルコシド	1.0							1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0			1.0	1.0	
オウレン		0.5																0.5				
オンジ			0.5															0.5				
カニコン				0.5															0.5			
クマセバ					0.5														0.5			
クラメリヤ						0.5												0.5				
サボテンソク							0.5												0.5			
サルビア								0.5												0.5		
スイセン									0.5									0.5				
セイヨウノコギリソウ										0.5									0.5			
セイヨウトチノキ											0.5									0.5		
チャ												0.5								0.5		
チヌーリップ													0.5							0.5		
ヒロウチアオイ														0.5							0.5	
ハツカダイコン															0.5						0.5	
ビート																0.5					0.5	
ヒガンバナ																	0.5				0.5	
ヘンナ																		0.5			0.5	
コウジ菌またはコウジ菌グルコシドの配合量 (%)	81	83	87	85	88	89	95	97	97	95	100	98	98	99	97	96	97	100	100	100	100	

【0036】＜試験例2＞ 紫外線紅斑抑制作用

体重300g前後の黄褐色モルモットを試験に用いた。実験前日に、モルモットの腹側部を脱毛した。実験時3つの小孔（径12mm）をあけたテープを脱毛部にあて、紫外線ランプ（H-400-F、東芝）を20cmの距離から40秒間照射した。照射直後に検体（下記のクリーム基剤及びそれに表2に記載の有効成分を配合したもの）50mg/siteを30秒間たんねんに塗布

した（なお、本試験における植物エキスは、原植物を10gに溶媒100mlを加え、室温で3時間攪拌した後、蒸発乾固したものを用いた）。紫外線照射後3時間目に肉眼的観察を行い、照射部位が明瞭な境界をもった紅斑を3点、不明瞭な境界をもった紅斑を2点、わずかに紅斑の認められるものを1点、紅斑の認められないものを0点と判定し比較した。結果を表2に示す。さらに、紅斑強度を判定した後、被検部位にUV-Bで1日

1回90秒、3日毎に計3回照射した。照射開始日か *皮膚の着色度を判定した。
ら、検体を1日3回20日連続塗布を続け、20日目に* 【0037】

試験用クリーム基剤

(重量%)

(A) モノステアリン酸

ポリオキシエチレングリコール(40E.O.)	2.00
自己乳化型モノステアリン酸グリセリン	5.00
ステアリン酸	5.00
ベヘニルアルコール	1.00
流動パラフィン	1.00
トリオクタン酸グリセリン	10.00
防腐剤	適量
香料	微量

(B) 1,3-ブチレングリコール

5.00

精製水

残余

(A)に属する成分を加熱溶解し(油相)、別に、

※2 : わずかな色素沈着を認める。

(B)成分に属する成分を加熱溶解した(水相)。油相

1 : 中程度の色素沈着を認める。

に水相を添加し、攪拌乳化後、冷却してバニシングクリ

0 : コントロール部位(無処置)と変わらない。

ーム基剤を得た。

-1 : コントロール部位(無処置)よりも強い色素沈

【0038】判定基準

20 着を認める。

3 : 色素沈着をまったく認めない。

※ 【0039】

表2-1

有効成分	有効成分の配合量(重量%)																		
	比較例																		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
コウジ酸	0.5																		
コウジ酸グルコンド		0.5																	
植物 エキ ス	オウレン			0.5															
	オンジ				0.5														
	カコン					0.5													
	クマハゼ						0.5												
	クラメリア							0.5											
	サボンソウ								0.5										
	サルビア									0.5									
	スイセン										0.5								
	セイヨウノコギリソウ											0.5							
	セイヨウトチノキ												0.5						
	チャ													0.5					
	チューリップ														0.5				
	ビロウダオイ															0.5			
	ハツカダイコン																0.5		
	ビート																	0.5	
	ヒガンバナ																		0.5
	ヘンナ																		0.5
効果	紅斑強度	1	1	3	2	2	3	3	3	2	3	3	2	2	3	3	3	3	2
判定	色素沈着度	2	2	0	1	1	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	1

【0040】

有効成分		有効成分の配合量（重量％）																						
		例																						
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
コウジ酸		0.5		0.5				0.5			0.5		0.5		0.5			0.5	0.5	0.5	0.5			
コウジ酸グルコンド		0.5			0.5			0.5				0.5			0.5								0.5	
オウレン		0.5						0.5				0.5						0.5					0.5	
オンダ			0.5																0.5				0.5	
カヤコン				0.5															0.5					
クマハゼ					0.5															0.5				
クマメリア						0.5															0.5			
ワボンソウ							0.5															0.5		
サルビア								0.5															0.5	
スイセン									0.5														0.5	
セイヨウコゴロシソウ										0.5													0.5	
セイヨウトチノキ											0.5												0.5	
チャ												0.5											0.5	
チャーリアブ													0.5										0.5	
ビロウダアオイ														0.5									0.5	
ハツタダイコン															0.5								0.5	
ビート																0.5							0.5	
ヒガンバナ																	0.5						0.5	
ヘンナ																		0.5					0.5	
効果	紅花煎	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
判定	色紫比尋常	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	

【0041】

*意味する。

【処方例】以下に本発明の処方例を挙げる。なお、処方

【0042】

例中、「適量」とは処方全体が100重量%になる量を*40

<処方例1> クリーム

(重量%)

1. モノステアリン酸ポリエチレングリコール(40E.O.) 2. 00
2. 自己乳化型モノステアリン酸グリセリン 5. 00
3. ステアリン酸 5. 00
4. ペヘニルアルコール 1. 00
5. 流動パラフィン 10. 00
6. トリオクタン酸グリセリル 10. 00
7. パラオキシ安息香酸エステル 0. 20
8. 1, 3-ブチレングリコール 5. 00

13	14
9. エデト酸二ナトリウム	0.01
10. コウジ酸	1.00
11. オウレン (水エキス)	0.50
12. オンジ (エタノールエキス)	0.10
13. 精製水	適量

製造方法

- A. 1ないし6を加温、溶解する。
 B. 7ないし13を加温、溶解する。
 C. AにBを加え乳化、攪拌し、冷却する。

* D. Cを冷却後、容器に充填し、検査後製品とする。

用法及び用量

適量に顔面に塗擦する。

* 【0043】

<処方例2> 乳液

	(重量%)
1. モノステアリン酸ポリエチレンソルビタン(20E.O.)	2.00
2. テトラオレイン酸ポリオキシエチレンソルビット	
	(60E.O.) 0.50
3. 親油型モノステアリン酸グリセリン	1.00
4. ステアリン酸	0.50
5. ベヘニルアルコール	0.50
6. アボガド油	4.00
7. トリオクタン酸グリセリル	4.00
8. パラオキシ安息香酸エステル	0.20
9. 1, 3-ブチレングリコール	5.00
10. キサンタンガム	0.14
11. エデト酸二ナトリウム	0.01
12. コウジ酸	4.00
13. クズ (エタノールエキス)	5.00
14. 精製水	適量

製造方法

- A. 1ないし7を加温、溶解する。
 B. 8ないし14を加温、溶解する。
 C. AにBを加え乳化、攪拌し、冷却する。

* D. Cを冷却後、容器に充填し、検査後製品とした。

用法及び用量

適量に顔面に塗擦する。

※30 【0044】

<処方例3> 化粧水

	(重量%)
1. ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油 (60E.O.)	8.00
2. エタノール	15.00
3. コウジ酸グルコシド	7.00
4. クマセバ	
	(水とプロピレングリコールの1:1エキス) 2.00
5. クラメリア (水エキス)	0.50
6. パラオキシ安息香酸エステル	0.10
7. クエン酸	0.10
8. クエン酸ナトリウム	0.30
9. 1, 3-ブチレングリコール	4.00
10. エデト酸二ナトリウム	0.01
11. 精製水	適量

製造方法

- A. 1ないし11を均一に攪拌、溶解する。
 B. Aを容器に充填し、検査後製品とする。

★用法及び用量

適量に顔面に塗擦する。

★ 【0045】

<処方例4> 軟膏剤

	(重量%)
1. モノステアリン酸ポリエチレングリコール(40E.O.)	2.00

15	16
2. 自己乳化型モノステアリン酸グリセリン	5. 00
3. ステアリン酸	5. 00
4. ベヘニルアルコール	1. 00
5. 流動パラフィン	10. 00
6. トリオクタン酸グリセリル	10. 00
7. パラオキシ安息香酸エステル	0. 20
8. 1, 3-ブチレングリコール	5. 00
9. エデト酸二ナトリウム	0. 01
10. コウジ酸	1. 00
11. サボンソウ(1, 3-ブチレングリコールエキス)	0. 10
12. セージ(プロピレングリコールエキス)	0. 40
13. スイセン(水エキス)	1. 00
14. 精製水	適量

製造方法

- A. 1ないし6を加温、溶解する。
 B. 7ないし14を加温、溶解する。
 C. AにBを加え乳化、攪拌し、冷却する。

* D. Cを冷却後、容器に充填し、検査後製品とする。

用法及び用量

適量に顔面に塗擦する。

* 【0046】

<処方例5> バップ剤

	(重量%)
1. ポリアクリル酸	30. 00
2. コウジ酸	0. 50
3. セイヨウノコギリソウ(水エキス)	0. 10
4. マロニエ(プロピレングリコールエキス)	0. 05
5. チャ(エタノールエキス)	0. 05
6. ポリアクリル酸ソーダ	7. 00
7. 塩化アルミニウム	0. 30
8. 濃グリセリン	20. 00
9. モノオレイン酸ソルビタン	1. 00
10. 酸化チタン	4. 00
11. 精製水	適量

製造方法

- A. 1ないし5, 9及び11を加温、溶解する。
 B. 6ないし8及び10を加温、溶解する。
 C. AにBを加え均一に攪拌し、混合する。

* D. Cを冷却後、塗布剤に塗布し、検査後製品とした。

用法及び用量

ライナーを剥離し、患部に塗布する。

* 【0047】

<処方例6> 浴用剤

	(重量%)
1. 流動パラフィン	65. 00
2. ジー2-ヘプチルウンデカン酸 グリセリンモノステアレート	5. 00
3. ポリオキシエチレン(2E.O.) グリセリンモノステアレート	2. 00
4. ポリオキシエチレン(9E.O.)モノオレート	2. 00
5. ポリオキシエチレン(3E.O.)ラウリルエーテル	5. 00
6. ビタミンE	0. 20
7. コウジ酸モノパルミテート	2. 00
8. チューリップ(水エキス)	3. 00
9. 香料	1. 00
10. 色素	微量
11. エタノール	適量

製造方法

50 A. 1ないし9を混合溶解する。

B. 11に10を添加し、溶解する。

* 用法及び用量

C. AにBを加え均一に攪拌する。

適量を浴槽に入れ入浴する。

D. Cを軟カプセルに充填し、検査後製品とした。

* 【0048】

<処方例7> エッセンス

	(重量%)
1. 1%カルボキシビニルポリマー溶液	10.00
2. グリセリン	20.00
3. ヒアルロン酸	0.50
4. エタノール	7.00
5. コウジ酸ガラクトミド	3.00
6. コウジ酸	2.00
7. ピロウダアオイ(水とエタノールの2:1エキス)	1.00
8. ハツカダイコン(水エキス)	0.20
9. ビート(水エキス)	0.10
10. ヒガンバナ(水エキス)	0.01
11. ヘンナ(水エキス)	0.01
12. 精製水	適量

製造方法

上記の各成分を混合、均一に攪拌、溶解しエッセンスを製造した。

用法及び用量

適量顔面に塗擦する。処方例1ないし7の皮膚外用剤は、いずれも本発明の目的を満足する効果を有する製剤であることが確認された。

【0049】

20 【発明の効果】本発明によれば、コウジ酸及び／又はその誘導体と、特定の植物のエキスの少なくとも1種を併用することによって、コウジ酸及び／又はその誘導体の光分解による安定性を高め、かつ、紫外線紅斑抑制作用等において優れた効果を示す皮膚外用剤が提供される。